

くずし字による古典教育の試み (3) —高校生と読む「北斎だるせん」—

加藤直志・加藤弓枝¹・三宅宏幸²

【抄録】 日本近世文学会の「出前授業」の一環として、同学会から2名の研究者を講師に迎え、くずし字を読む特別授業を協同で実施した。高校1年生を対象に、1年間で学習した文語文法を生かしながら、葛飾北斎が名古屋滞在中に描いた「大だるま図」に関する記録をくずし字で読むことを試みた。事前と事後のアンケート調査も実施し、高校においても、くずし字の解説が古典への関心・意欲を喚起するのに有効な方法になり得ることを明らかにした。

【キーワード】 くずし字 日本近世文学会 和本リテラシー 北斎 古典教育

1. はじめに

名古屋大学教育学部附属中学校では、2016年3月以来、和本リテラシー向上（復活）のための「出前授業」を実践してきたが（注1）、2018年3月には、初めて同附属高等学校（以下、「本校」）でも実施した。

本稿で紹介する授業実践を行った頃、ちょうど前後して、次期高等学校学習指導要領とその解説が公表された（注2）。これまでの科目構成を大幅に変更し、「現代の国語」「言語文化」「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」といった、「国語表現」以外は耳慣れない科目名が並び、教育関係者からの戸惑いや不安、あるいは批判などの声が挙がっている。これらの科目構成全般について議論すべき点は多々あるものの、本稿のねらいは、くずし字を古典教育に取り入れることの意義を論じ、その実践例を紹介することにある。

さて、そのような観点で次期高等学校学習指導要領を読むと、共通必修科目である「言語文化」の内容（2）「我が国の言語文化に関する次の事項」ア～カの6項目のうちの「エ」に、「時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解すること。」（注3）という注目すべき記述がある。「解説」の「第1章 総説」においても、単に「言葉の変化」とするのではなく、「今回の改訂では、中学校書写との接続を意識して、共通必修科目「言語文化」において、**文字の変化**について理解を深めることを新設している。」

（注4）と取り上げられており、従来との違いが強調されている。「第2章 国語科の各科目」においても、「**時間の経過**による**文字**の変化については、まず中国から借りてきた漢字のみを用いて書くことから始まり、やがて漢字を省略したり崩したりした片仮名、平仮名を漢字とともに組み合わせるようになった。このことは文字だけに限らず、語彙や文体にも大きな変化をもたらした。」（注5）とさらに詳しく述べられている。実際に、言葉の意味の変遷などは、大学入試対策として熱心に指導されてきたが、漢字を崩すことで仮名が生まれた結果、漢字に比べて平易な仮名の普及が前近代の日本人の識字率向上に寄与したということ（注6）などについてはほとんど指導されてこなかったのではないかと。170年前の各国の識字率と現在の国民一人あたりのGDPとの間には相関があるとの指摘もあり（注7）、文字や言葉の歴史について学ぶことには、様々な意味があるということに気付かされる。また、中学校3年間の「国語」（注8）および高校の「言語文化」においては、古典の世界に親しむという内容が含まれており、古典教育の入門段階においては「古典に親しむ」ことを重視している点、現行の学習指導要領を引き継いでいるといえる。

日本近世文学会会員である加藤弓枝、三宅宏幸と、本校国語科の加藤直志の3人は、古典への興味・関心を高めることをねらいとした授業開発・実践を行ってきた。それらは、くずし字に触れることで文字の変化についての理解を深めることにもつながる内容にもなっている。本稿は、2018年3月15日（木）に、高校1年生のうち1

*1 鶴見大学文学部准教授

*2 愛知県立大学日本文化学部准教授

クラスを対象に行った授業の実践報告である。

2. 古典学習に関するアンケート（事前）

今回も、出前授業の前後に、古典学習に関するアンケートを実施し、高校1年生の国語および古典についての意識や授業の効果を探ってみた。本節では、出前授業の前時に行った事前アンケートの集計結果とその分析を掲載する。対象は、本校の2017年度の高校1年生のうちの1クラスである（本校は高校に各学年3クラスを置くが、本実践はそのうち1クラスのみで行った）。また、2016年度の中学1年生2クラス（中学には各学年2クラスを置く）を対象としたアンケート（事前）と比較するため、同一の質問事項とした（注9）。

まず、「くずし字を見たことはありますか？」という問いには、28名（80.0%）が「はい」と答えた〔2016年度中1は74名（92.5%）〕。【表①】は、国語や古典の学習、くずし字についての意識調査の結果である。各項目上段が2017年度高校1年生、下段が2016年度中学1年生であり、母数も異なる。

【表①】（対象 上段（高校）35名、下段（中学）80名）

| | ア | イ | ウ | エ |
|--------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 国語の学習は大切だと思いますか？ | 25人 71.5% | 10人 28.6% | 0人 0.0% | 0人 0.0% |
| | 48人 60.0% | 29人 36.3% | 2人 2.5% | 1人 1.3% |
| 国語の学習は好きですか？ | 8人 22.9% | 15人 42.9% | 10人 28.6% | 2人 5.8% |
| | 30人 37.5% | 35人 43.8% | 9人 11.3% | 6人 7.5% |
| 古典の学習は大切だと思いますか？ | 9人 25.8% | 13人 37.2% | 11人 31.5% | 2人 5.8% |
| | 24人 30% | 34人 42.5% | 16人 20% | 6人 7.5% |
| 古典の学習は好きですか？ | 9人 25.8% | 14人 40.0% | 7人 20.0% | 5人 14.3% |
| | 33人 41.3% | 28人 35% | 13人 16.3% | 6人 7.5% |
| くずし字が読めると良いと思いますか？ | 7人 20.0% | 16人 45.8% | 7人 20.0% | 5人 14.3% |
| | 19人 23.8% | 31人 38.8% | 15人 18.8% | 15人 18.8% |

（%は、小数点以下第1位未満の数値を切り上げた）

ア：そう思う

イ：どちらかというと思う

ウ：どちらかといえばそう思わない

エ：そう思わない

驚くべきことに、調査対象とした高校1年生の100%が「国語の学習は大切だと思う」と回答し（アとイの回答を合算した数値を示す）、ほとんどの生徒が国語を学

ぶ重要性を認識していることがうかがえた。一方で、「古典の学習は大切だと思う」と回答したのは63%（ア＋イ）に留まり〔2016年度中1は72.5%〕、国語全般としては重要な科目として認識しているものの、古典に絞ると学ぶ意義を見出しにくいと考えている生徒も一定数いることがわかった。また、「古典の学習は好き」という回答も65.8%（ア＋イ）に留まる〔2016年度中1は76.3%〕。ここからは推測も含まれるが、高校入学後1年近くを経た生徒達の実態としては、国語を学ぶ重要性については認識しつつも、約1年間、古典の時間に文語文法や古文単語など、暗記中心の学習を強いられた結果、中学1年生段階よりも古典を敬遠してしまう生徒が出てきているのではないか。この調査では、「国語の学習は好きか？」という問いに対して否定的な回答（ウ＋エ）をした34.4%の生徒達にその理由を尋ねることまではしていないため詳細は不明であるが、高校に入って、古典の比重が増したことが背景にあるのかもしれない〔2016年度中1は18.8%〕。また、くずし字についての認識は、読めると良いと思っている生徒の方が相対的には多いものの、必要性を感じていない生徒も一定数いるという点で、中学1年生と高校1年生で大きな差はなかった。

本稿で紹介するくずし字による古典教育の試みは、前節で述べた「文字の変化」について理解を深めさせることに加えて、本節で紹介した事前アンケートの結果から浮かび上がってきた課題を踏まえ、古典に親しませたり、古典を学ぶ意義について考えさせたりすることをねらいとした。

3. 教材について

本実践において扱った教材は、江戸後期に尾張（現名古屋）で記録された高力種信（猿猴庵）著『北斎大画即書細図』（文化14年〔1817〕）である。日本を代表する浮世絵師葛飾北斎は、文化14年10月5日、訪れていた名古屋で巨大なだるまの半身像を即興で描いた。西掛所（現本願寺名古屋別院〔西別院〕）を場所として借り、その大きさはというと120畳（縦約18メートル、横約11メートル）である。当時、この興行は広告が貼り出されたこともあって大変な話題となり、北斎は名古屋の人々から「達磨先生」、略して「だるま」ともてはやされた。本書はそのときの様子を尾張藩士の高力猿猴庵が記録したものである。原本は名古屋市博物館に所蔵され、2017年11月に行われた展覧会「北斎だるせん」の図録には、縮小版の影印が附録として備えられた。

本資料の興味深い点は、単に北斎が大きなだるまを描いた事実のみを記したわけではなく、その時に使われた道具、だるまが描かれるまでの過程、観客の様子、だるま図の大きさを表す俯瞰図など、北斎による興行の様子

を事細かに記録した点である。例えば、使用された道具は、120畳の紙、米俵五俵分の藁わらを束ねた大筆、三俵分の中筆、一俵分の筆、蕎麦殻そばからの筆などの多種多様な筆、色を付けるための桶や柄杓、その色が広がりすぎないための雑巾、紙の重しとする杉丸太などであったことを記し、北斎や門人たちがそれらを駆使して大だるまを描いたことが記述からわかる。そして、だるま図を描く過程としては、北斎はまずだるまの鼻から描き、続いて眼、口、耳の順ひげに筆を進めた。次に蕎麦殻の筆を用いてだるまの月代さかやきや髭ひげなどを描き、そして米俵五俵分の大筆を用いて身体からだの部分を描いたのであった。北斎の門人は、北斎の側に立って桶に入った墨を持ち、あるいは筆を運び、柄杓で絵の具を垂らして彩色を施したりと、大だるま図の作成に尽力している。かくして、完成した約18メートルの大だるま図は境内に掲げられ、多くの見物人で賑わったという(注10)。

今回、上記の資料を題材として取り挙げたのにはいくつか理由がある。これまで筆者達は中学1年生を主な対象として授業を行ってきた。小学校から中学校にかけては、現代語訳が付された、比較的平易な古文に親しむ学習が中心であり、高校生ほど古文に苦手意識を持っていない生徒が多い。そのため、昔話(「桃太郎」「さるかに合戦」)を用いて生徒達の興味を惹くことで、苦手意識を持つ前に、古文の楽しさを伝えたり、学ぶ意義を認識させたりすることをねらいとしていた。しかしながら、今回は高校生を対象としており、文語文法や古語などについて一定の知識を有している。学習には苦勞が伴うものの、知識を身につけたことにより、現代語訳が付いていなかったり、より高度で複雑であったりする文章でも読み解くことができるという達成感を味わわせることで、古文を学ぶ意義を実感して欲しいというねらいがあった。授業時間50分という制約のもと、生徒達に馴染みがあり、かつ興味を惹き、教科書に載っているような通常の「古文」とは異なる面白みを持つ教材を探していた折、加藤直志から、対象とする高校1年生が使用している英語の教科書に北斎のことが書かれている単元があり(注11)、その挿絵部分に『北斎大画即書細図』が用いられている、「出前授業」の教材として面白いのではないか、という意見が出された(注12)。英語の教科書では『北斎大画即書細図』を深く掘り下げてはなかったが、前述したように、2017年11月には名古屋博物館で展覧会が行われており、本資料の記述をもとに大だるま図が「再現」される企画まで行われた(注13)。中にはその企画を実際に見に行った生徒もいた。これらのことから、対象となる生徒達にも馴染みがあり、名古屋で行われた興行ということで本資料に親近感を覚えるのではないかと考えた。以上が一つめの理由である。

さらに二つ目の理由として、本資料には大だるまが描かれる過程が文章として細かに記されている点である。

本校の場合、高校1年生の3月は、文語文法を一通り学び終わったところである。しかし、助動詞の活用など、暗記学習に追われるあまり、何のために文語文法を覚えなければならないのかがわからず、古文に対する苦手意識を持ってしまったり、学ぶ意義を見出せなくなったりする生徒も少なくない(理系に進む生徒には特に多い)。そのため、くずし字を「文字」として読んだ上で、これまでに学習した文法を用いて「内容」をも理解するという二段階の過程を課すにあたって、本資料には「大だるま図を北斎たちがどのように描いたのか」という設問が作りやすい面があり、また生徒達も文語文法や古語の知識を役立てることができ、興味を持ちやすい面を有している。

さらにいえば、生徒達自身が学ぶ名古屋という土地でかつて行われた大だるまを描く興行、その絵を描くための準備や門人達の様子など、くずし字を読み、なおかつ内容を理解することで、当時の熱気を知り、人から教わるのではなく自ら歴史を学ぶ契機となる。その学びはグローバル社会と呼ばれる中で、英語の教科書で紹介されるような、世界でも有名な北斎の偉業を自身の力で世界に伝えることができるという自信にもつながろう。

以上が、『北斎大画即書細図』を題材として選定した理由である。

4. 指導の実際

本節では、授業の内容について具体的に述べる。本稿末尾に掲載した、【資料①】(当日の授業の学習指導案)と【資料②～⑤】(スライドおよびプリント)をあわせて参照して欲しい。

高校1年生で実施した授業であり、カリキュラム上は「国語総合」として位置づけられるが、「古典A」「古典B」などとも関連する内容であり、それらの科目における単元目標も掲げた。また、参考までに、次期高等学校学習指導要領における対応箇所も掲載した。

まず、導入では、スライド【資料②】を用いて、蕎麦屋の看板や割り箸ばしの包みなどを見せた後、「この1000年で最も重要な功績を残した世界の人物100人」(アメリカの雑誌『LIFE』による)に北斎が選ばれていること、ローマでの北斎展のポスターなどを紹介し、北斎が外国で大変有名であることを述べた。その後、名古屋で出版された『北斎漫画』や、名古屋で描かれた大だるま図を紹介しながら、名古屋とも縁が深い人物であるということ、尾張藩士高力種信(猿猴庵)が大だるま図製作の様子を詳細に記録しており、それをくずし字で読むことで、北斎への理解を深めることがこの授業の目標であることを述べた。生徒達は英語の教科書の挿絵で大だるま図を知っていたため、興味を持ちやすい様子であった。

展開1以降は、授業プリント【資料③④】も配布し、

机を向かい合わせにして、4人グループを作らせた（なお、実際に生徒達に配布した授業プリントはカラー印刷のものを用了）。

展開1・2では、授業プリント【資料③】の1枚目（1・2頁）の図版Aを読むことで、北斎がどのような手順で大だるまを描いたのかを考えさせた。まず展開1で、1行目と5行目に絞って、クイズ感覚でくずし字の解説に挑ませた。授業者3人で机間指導を行い、字母にも注意させるなど、くずし字解説のための助言をしながら進めた。三宅が生徒を指名して発表させ、解答を板書していった。展開2では、5行目の「出来せしかば」に絞って、現代語に訳すという課題に取り組ませた。中学生と異なり、高校では文語文法を本格的に学ぶ。その過程で古典嫌いの生徒が増える傾向があることはすでに指摘したところであるが、文法を学んだからこそ、知識を生かして、自分の力で古文を理解することができるということを実感して欲しかったからである。ここでは、加藤直志が、「しか」が過去の助動詞「き」の已然形であることを生徒に指摘させ、サ変動詞に接続する場合は未然形に接続する場合もあるということや、接続助詞「ば」の復習などもしながら、「出来てきたので」という現代語訳を導いた。三宅が、図版A全体の解説をしながら、大だるまが描かれた手順を確認して展開3・4へと進んだ。

展開3・4では、授業プリント【資料③】の2枚目（3・4頁）の図版Bを読むことで、北斎の門人が何をしているのかを読み取らせた。展開3の冒頭で、三宅が「絵を見ただけでは何をしているのかわからない。くずし字を読んでみよう。」とここでの目標を明示した。展開1とはほぼ同様の手順で、くずし字の解説に挑ませ、三宅が生徒を指名し、解答を板書していった。展開4では、傍線部A「雑巾ぞかきんをもてこれをおさへしめりをとるなり」を現代語に訳す課題に取り組ませた。加藤直志が、断定の助動詞「なり」を生徒に指摘させながら、「雑巾でこれを押さえて湿り気をとるのである」という現代語訳を導いた。三宅が、門人が北斎の大だるま製作を手伝う様子を解説して、終結部に進んだ。

終結部では、「一年間学んできた古典の授業と、今日の授業とを比較し、共通する点、異なる点を書いてください。」という課題を与えた。教科書に載っている物語や和歌などが、昔の人が書いたもののすべてではないということ、その一方で、文語文法や古文単語など普段の授業で学んでいる知識が役に立つのだということに気づかせることを意図した課題である。

以下、生徒達の解答の一部を紹介する。

[共通する点]

- ・文法の理解が必要という点。
- ・助動詞の意味が分からないと訳すのが難しい。

- ・あたりまえだけれど、同じ文法で、今まで勉強したことが使えるものだった。

[異なる点]

- ・今までの古典では、すでに私たちが読める字で書いてあったが、今回の授業では、字を解説するところから始まった。
- ・字（現代の文字と崩し字）
- ・普段の授業では、割と一人一人でやる感じもあったが、今日はグループで楽しく議論しながらすることができた。
- ・教科書に載っていない、楽しめる内容だった。
- ・平安時代などの文章に比べて現代語に近い。濁点がある。

[共通する点]については、こちらの狙い通りの回答が多数を占めたが、[異なる点]では「くずし字で書かれている」といった回答が多かった。考えてみれば当然で、生徒達からすれば、何が書かれているのかということ以上に、文字が異なるということのインパクトが非常に大きいのだとこちらが逆に気付かされた。古典といっても教科書に載っているようなものばかりとは限らない、今回のように、「美術」や「英語」に関わるようなものなど様々あるが、それらが古典の時間に学んでいるものとのつながりを持っている、ということを加藤直志が補足した。最後に、加藤弓枝が活字化されている古典がわずか1%弱であり、くずし字を読めるようになると様々な古典を読むことができるということや、近年では京都大学の地震研究者がくずし字で書かれた古文書を読み解く研究に取り組んでおり、理系分野においても古典を学んでおく意義があるということなどを述べて、今回の出前授業を終えた。（【資料⑤】の課題2は、時間がなくて書けなかった生徒については、事後アンケートの際に書いてもらった）

5. 古典学習に関するアンケート（事後）とまとめ

出前授業の次時には事後アンケートも実施した。回答数が事前アンケートと異なっているのは、欠席等の事情による。結果は以下の通り【表③】。また、【表①】と【表③】の比較をしたのが、【表④】である。

出前授業を実施する前と後では、以下の変化が認められた。（アとイの回答を合算した数値を示した）

- ・「国語の学習は大切だと思う」と答えた回答率には、ほぼ変化がない。(100%→97.1%)
- ・「国語の学習が好き」だと答えた回答率には、ほぼ変化がない。(65.8%→69.8%)
- ・「古典の学習は大切だと思う」と答えた回答率は、増加した。(63.0%→81.9%)
- ・「古典の学習が好き」だと答えた回答率は、増加した。

(65.8%→75.9%)

・「くずし字が読めると良いと思う」と答えた回答率は、かなり増加した。(65.8%→91.0%)

【表③】 (対象 高校33名)

| | ア | イ | ウ | エ |
|--------------------|--------------|--------------|-------------|-------------|
| 国語の学習は大切だと思いますか？ | 22人 66.7% | 10人 30.4% | 1人 3.1% | 0人 0.0% |
| 国語の学習は好きですか？ | 10人 30.4% | 13人 39.4% | 9人 27.3% | 1人 3.1% |
| 古典の学習は大切だと思いますか？ | 11人 33.4% | 16人 48.5% | 5人 15.2% | 1人 3.1% |
| 古典の学習は好きですか？ | 10人 30.4% | 15人 45.5% | 3人 9.1% | 5人 15.2% |
| くずし字が読めると良いと思いますか？ | 6人 18.2% | 24人 72.8% | 3人 9.1% | 0人 0.0% |

(％は、小数点以下第1位未満の数値を切り上げた)

ア：そう思う

イ：どちらかというと思う

ウ：どちらかといえばそう思わない

エ：そう思わない

【表④】 (対象 事前35名、事後33名 いずれも高校)

| | ア | | イ | |
|--------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| | 事前 | 事後 | 事前 | 事後 |
| 国語の学習は大切だと思いますか？ | 25人 71.5% | 22人 66.7% | 10人 28.6% | 10人 30.4% |
| 国語の学習は好きですか？ | 8人 22.9% | 10人 30.4% | 15人 42.9% | 13人 39.4% |
| 古典の学習は大切だと思いますか？ | 9人 25.8% | 11人 33.4% | 13人 37.2% | 16人 48.5% |
| 古典の学習は好きですか？ | 9人 25.8% | 10人 30.4% | 14人 40.0% | 15人 45.5% |
| くずし字が読めると良いと思いますか？ | 7人 20.0% | 6人 18.2% | 16人 45.8% | 24人 72.8% |

(％は、小数点以下第1位未満の数値を切り上げた)

ア：そう思う

イ：どちらかというと思う

事後アンケートでは、「授業の感想を書いてください。」という自由記述欄も設けた。一部を紹介する。

- ・暗記がないと古文もそれなりには面白いことを今回の授業を受けて気づいた。
- ・今回のプリントを使って祖母の年賀状を解説したい。
- ・くずし字に触れる機会はあまりないので、今回このような授業を受けることができるとも楽しかった。原文にしか伝えることのできない部分もあるのだと知った。
- ・暗号をといっているような気分で楽しかった。助動詞の大切さ(意味・活用・接続)を改めて感じた。

数値的データとともに自由記述からも、くずし字を通じて、古典に親しませ、古典への学習意欲を喚起するという本実践のねらいが、かなりの程度、達成されたことがうかがえる。また、くずし字に触れることで、漢字から仮名への「文字の変化」を実感することもできたのではないだろうか。

すでに述べてきた通り、高校における新科目「言語文化」では、「文字の変化」についても学ぶことになった。とはいえ、高校の国語科教員のなかには、これまであまりくずし字に触れたことのない方もいらっしゃるかもしれない。これまでの実践を踏まえた、くずし字による古典教育に関する出版物などがあると、小・中・高、あるいは大学の先生方が授業で利用しやすく、また、一般の方がくずし字を通して古典に触れるきっかけにもなるのではないだろうか。文語文法や古文単語などの知識ももちろん必要なものであるが、それらを身につけるための参考書類は、すでに数多く出版されている。くずし字を通して、古典を学ぶ意義について考えたり、古典に親しんだりする指導を併せて行うことで、これまでの古典教育のよい点を継続しつつ、新たな展望が開けるのではないか。今後の課題としたい。本稿ではあまり触れることができなかったが、高校における新科目「古典探究」(選択科目)や、中学校の書写との関連などにも留意しながら、くずし字による古典教育の試みを継続していきたい。

(注)

- 1 これまでの実践については、加藤直志・加藤弓枝・三宅宏幸「くずし字による古典教育の試み —日本近世文学会による出前授業—」(『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』第61集、2016年12月)、同「くずし字による古典教育の試み(2) —江戸時代の「さるかに合戦」を読む—」(『名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要』第62集、2018年3月)で詳細を報告した。
- 2 文部科学省「高等学校学習指導要領 平成30年3月告示」(文科省ホームページ、http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf、2018年8月2日閲覧)、文部科学省「高等学校学習指導要領解説 国語編 平成30年7月」(文科省ホームページ、http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2018/07/13/1407073_02.pdf、2018年8月2日閲覧)。
- 3 文部科学省「高等学校学習指導要領 平成30年3月告示」(注2前掲)、29頁。
- 4 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 国語編 平成30年7月」(注2前掲)、39頁。なお、引用文中のゴシック体は原文のままである(注5も同様)。
- 5 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 国語編 平成30年7月」(注2前掲)、121頁。
- 6 中日新聞2018年2月9日(朝刊)文化欄「変革の源流 歴史学者・磯田道史さんに聞く4 —スムーズな近代化—」。
- 7 (注6)と同じ。
- 8 文部科学省「中学校学習指導要領 平成29年3月告示」(文科省ホームページ、http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2018/05/07/1384661_5_4.pdf、2018年10月16日閲覧)。
- 9 2016年度中学1年生へのアンケート結果は、加藤直志・加藤

弓枝・三宅宏幸「くずし字による古典教育の試み（2）—江戸時代の「さるかに合戦」を読む—」（注1前掲）で報告したものを利用している。2017年度高1と2016年度中1は同じ生徒ではないが、参考のため比較することとした。

- 10 名古屋市博物館『特別展「北斎だるせん！」図録』（2017年11月）および『名古屋市博物館資料叢書3 猿猴庵の本 北斎大画即書細図・女謡曲採要集』（2004年1月）。なお、『資料叢書3』には、翻刻も付されている。
- 11 田辺正美ほか12名『PROMINENCE English Communication I』（東京書籍、2017年2月）、Lesson 5 "Katsushika Hokusai, a Japanese Genius"。
- 12 文部科学省「高等学校学習指導要領 平成30年3月告示」（注2前掲）、45頁には、「言語能力の向上を図る観点から、外国語科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。」とある。
- 13 中日新聞2017年11月24日（朝刊）一面「即興 北斎大だるま」、同2017年12月9日（朝刊）文化欄「北斎の大だるま 再現振り返る」などで大きく報道された。



【謝辞】

本稿で紹介した授業の2日前に実施した、中学1年生を対象とした出前授業（2016年に実施したものと同一の内容）を、東海近世文学会の関係者数名の先生方が参観された。授業後、授業を2時間連続にすれば、よりゆったりと生徒達がくずし字や和本に触れる授業が展開でき、アクティブ・ラーニングにもつながるのではないかといった貴重なご意見をうかがった。中学や高校は教科担任制になっており、時間割変更をする際の制約が多く、50分前後で1コマという時間を基本として授業構成を考えている。とはいえ、全く不可能というわけではなく、総合的な学習の時間などとの関連を図るといった方法もあり得るだろう。参観していただいた先生方、ご意見を頂戴した先生方に御礼申し上げます。

【付記】

- ※1 本稿の執筆者の掲載順については、本校教員である加藤直志を最初に掲載し、加藤弓枝と三宅宏幸については五十音順で掲載した。あくまでも便宜的なものであり、研究内容の分担率等とは無関係である。
- ※2 本研究は、JSPS科研費JP18H00095の助成を受けている。
- ※3 「出前授業」の問い合わせは、日本近世文学会広報企画委員会の電子メールへ。
アドレスは、koho@kinseibungakukai.com

【資料①】

高等学校 国語科 学習指導案

指導者 加藤直志・加藤弓枝・三宅宏幸

1. 日 時 平成30年3月15日(木) 第3限
2. 対 象 名古屋大学教育学部附属高等学校 第1学年A組
3. 教 材 自作プリント「北斎だるせん」
出典：名古屋市博物館編『名古屋市博物館資料叢書3・猿猴庵の本 北斎大画即書細図
・女謡曲採要集』(2004年1月)
※一部を加工した上で教材として使用した。
4. 単元の見本 (全1時間)
[現行学習指導要領]
 - ・ 言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気づき、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること。
(国語総合〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1)のアの(ア))
 - ・ 文語のきまり、訓読のきまりなどを理解すること。
(国語総合〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1)のアの(イ))
 - ・ 古典などに表れた思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察すること。
(古典A 2の(1)のア)
 - ・ 古典などを読んで、言語文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解すること。
(古典A 2の(1)のウ)
 - ・ 古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。
(古典B 2の(1)のウ)
 - ・ 古典を読んで、我が国の文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解を深めること。
(古典B 2の(1)のオ)
[次期学習指導要領]
 - ・ 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。
(言語文化 2の(2)のア)
 - ・ 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。
(言語文化 2の(2)のイ)
 - ・ 古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解すること。
(言語文化 2の(2)のウ)
 - ・ 時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解すること。
(言語文化 2の(2)のエ)
 - ・ 古典などを読むことを通して、我が国の文化の特質や、我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深めること。
(古典探究 2の(2)のア)
5. 本時の見本 (1) くずし字に親しむとともに、くずし字を学ぶ意義について知ること。
(2) くずし字を通して、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること。
(3) くずし字を通して、文語のきまりなどを理解すること。
6. 本時の評価規準 (◆)
 - (1) くずし字に親しむとともに、くずし字を学ぶ意義について知ることができたか。(知識・理解)
 - (2) くずし字を通して、伝統的な言語文化への興味・関心を広げることができたか。(関心・意欲・態度)
 - (3) くずし字を通して、文語のきまりなどを理解することができたか。(知識・理解)

7. 本時の展開

| | 学習内容 | 学習活動 | 指導上の留意点（・）と評価の観点（◆） |
|------------|--|---|---|
| 導入 7分 | <ul style="list-style-type: none"> 本時の内容と目標の確認。 葛飾北斎について扱うことを知る。 | <ul style="list-style-type: none"> くずし字（変体仮名）について知る。 北斎について知る。 | <ul style="list-style-type: none"> 蕎麦屋の看板などを写真で紹介し、くずし字が現代でも生きていることを理解させる。 北斎が外国でも有名であること、名古屋と縁が深いことを理解させる。 <p>◆…（1）（2）</p> |
| 展開1 15分 | <ul style="list-style-type: none"> くずし字を読解して、大だるまを描いた手順を読み取る。 | <ul style="list-style-type: none"> 授業プリント【資料③】と同時に配布したくずし字一覧表【資料④】を参照しながら、グループで「問題一」について考える。 | <ul style="list-style-type: none"> 4人グループを作らせる。 授業プリント【資料③④】を配布する（③は一枚目のみ）。 適宜、机間指導を行う。 くずし字の解説をしながら、例（に）を板書する。 生徒を指名し、くずし字の読みを答えさせる。 くずし字の解説をしながら、答え（①ば・②ね・③た・④せ・⑤し・⑥か・⑦ば）を板書する。 <p>◆…（1）（2）</p> |
| 展開2 4分 | <ul style="list-style-type: none"> 文語文法の知識を生かして、大だるまを描いた手順を読み取る。 | <ul style="list-style-type: none"> 「問題一」の5行目「出来せしかば」を現代語に訳す。 | <ul style="list-style-type: none"> 生徒を指名し、助動詞「き」、接続助詞「ば」などに注意しながら、現代語訳を完成させる。 <p>◆…（2）（3）</p> |
| 展開3 9分 | <ul style="list-style-type: none"> くずし字を読解して、北斎の門人が何をしているのかを読み取る。 | <ul style="list-style-type: none"> 授業プリント【資料③】と同時に配布したくずし字一覧表【資料④】を参照しながら、グループで「問題二」について考える。 | <ul style="list-style-type: none"> 授業プリント【資料③】の二枚目を配布する。 適宜、机間指導を行う。 生徒を指名し、くずし字の読みを答えさせる。 くずし字の解説をしながら、答え（⑧に・⑨ぬ・⑩れ・⑪し・⑫め・⑬り・⑭た・⑮る・⑯し・⑰め・⑱り・⑲を・⑳と・㉑る・㉒な・㉓り）を板書する。 <p>◆…（1）（2）</p> |
| 展開4 3分 | <ul style="list-style-type: none"> 文語文法の知識を生かして、北斎の門人が何をしているのかを読み取る。 | <ul style="list-style-type: none"> 「問題二」の波線部A「雑巾をもてこれをおさへしめりをとるなり」を現代語に訳す。 | <ul style="list-style-type: none"> 生徒を指名し、助動詞「なり」などに注意しながら、現代語訳を完成させる。 <p>◆…（2）（3）</p> |
| 終結 12分 | <ul style="list-style-type: none"> くずし字を学ぶ意義について考える。 | <ul style="list-style-type: none"> まとめのプリント【資料⑤】の「課題1」に取り組む。 くずし字を学ぶ意義についての理解を深める。 | <ul style="list-style-type: none"> まとめのプリント【資料⑤】を配布する。 生徒を指名し、考えを発表させ、板書する。 研究者の視点から、くずし字を学ぶ意義について補足する。 まとめのプリントを回収する。 <p>◆…（1）（2）</p> |

※導入は主に加藤弓枝が、展開1・3は主に三宅が、展開2・4は主に加藤直志が、終結は主に加藤直志と加藤弓枝が担当した。机間指導は3人全員で行った。

【資料②】 スライド (パワーポイント)




日本近世文学会
「和本リテラシー」
出前授業

平成30年3月15日
名古屋大学教育学部附属高等学校
講師 三宅 宏幸 (愛知県立大学)
加藤 弓枝 (豊田高専)

1


くずし字とは？




生 そ ば
(楚) (者)

2

くずし字とは？



う
な(奈)
ぎ
蒲
焼



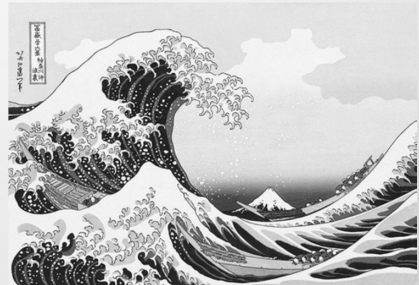
御
手
も
と(登)

3

Q 1
「この1000年で最も重要な功績を残した世界の人物100人」
に選ばれた日本人は？

4

Q 2 これは誰の作品？



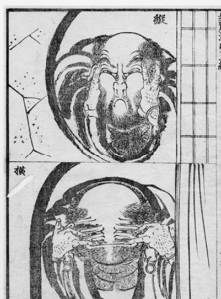
5

A
葛飾北斎
かつしか・ほくさい



6

ユニークな作品も多い




『北斎漫画』
→名古屋で
出版された

7

名古屋とも縁が深い北斎

- 文化14年 (1817)
- 北斎58歳
- 約縦18m、横11m
- 大だるまを描くイベント
- 「だるせん」(達磨先生)




8

記録者・尾張藩士
高力種信
(猿猴庵)

英語の教科書→


Here is a story that shows his unique talent and character. When he was working on the series of *Hokusai Manga*, he heard some people say that he could draw nothing more than very small pictures. When he heard this, he decided to create a large portrait of *Daruma* in front of a crowd of people. He kept on painting with large brushes for several hours. It was so big that people could not figure out what he had painted until it was hung from tall scaffolding the next morning.



Hokusai Tenmoku, Search album of an Impromptu Painting Performed by Katsushika Hokusai
高力種信の猿猴庵

9

くずし字を読んで
北斎にせまる！



10

現代に再現された「大だるま」

Culture

2017年12月24日

即興 北斎大だるま

200年ぶり 120畳 記録通り再現

壮大な実験 実り多く

名古屋西病院



11

【くずし字を学ぶ意義】

- ・知らない世界を自分の目で確かめることができる
- ・活字化されている古典籍はわずか1%

12

【くずし字や古典を学ぶ意義】

- ・国語の授業や受験勉強だけに役立つものではない
- ・理系の分野に進んでも役立つことが多い

13

【くずし字や古典を学ぶ意義】

- ・天文学
- ・防災
- 地震学
- 気象学
- …などなど



14

【資料③】教材プリント

日本近世文学会 和本文リテラシー出前授業 授業プリント
平成三十年三月十五日(木) 名古屋大学教育学部附属高等学校

問題一 北斎はどのような手順で大だるまを描いたのでしょうか。
右下の「翻字」で■になっているくずし字を読んで本文を完成させ、答えを見つけてください。また、「出来」は現代語に訳してください。

① 先 一 把 程 た
1 2 3 4 5 6 7
る 筆 例
て

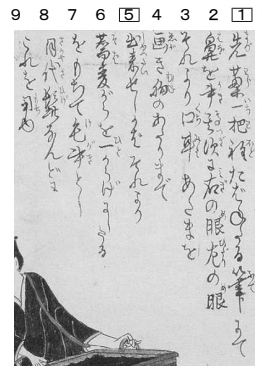
② 出 来
4 5 6 7

③ 出 来
4 5 6 7

④ 出 来
4 5 6 7

⑤ 出 来
4 5 6 7

【くずし字】(図版Aより)




① 先 一 把 程 た
2 鼻 を、書 其 次 に 右 の 眼 左 の 眼
3 それ より 口 耳 あ た ま を
4 画 き、胸 の あ た り ま で
5 出 来
6 蕎 麦 が ら を 一 か ら げ に し た る
7 を も ち て 毛 書 と し、
8 月 代 髻 な ん ど に
9 こ れ を 用 ゆ

【翻字】

① 先 一 把 程 た
2 鼻 を、書 其 次 に 右 の 眼 左 の 眼
3 それ より 口 耳 あ た ま を
4 画 き、胸 の あ た り ま で
5 出 来
6 蕎 麦 が ら を 一 か ら げ に し た る
7 を も ち て 毛 書 と し、
8 月 代 髻 な ん ど に
9 こ れ を 用 ゆ

【現代語訳】

【江戸時代の予告ポスター】



↑



図版A



↑



葛飾北斎

問題二 図版Bの○で囲まれた人は何をしているのでしょうか。傍線部8〜23のくずし字を読んで本文を完成させ、答えを見つけてください。


問題三 波線部Aを現代語に訳してください。

| |
|----|
| 14 |
| 15 |
| 所 |
| は |
| 取 |
| 持 |
| の |
| 人 |
| 々 |
| 雑 |
| 巾 |
| を |
| も |
| て |


A

| |
|----|
| 又 |
| あ |
| ま |
| り |
| に |
| 水 |
| 8 |
| 9 |
| 10 |
| て |
| 紙 |
| の |
| 11 |
| 12 |
| 13 |


『現代に再現された大だるま』



『中日新聞』朝刊・一面記事
平成29年11月24日付



図版B



何をしているのでしょうか？

